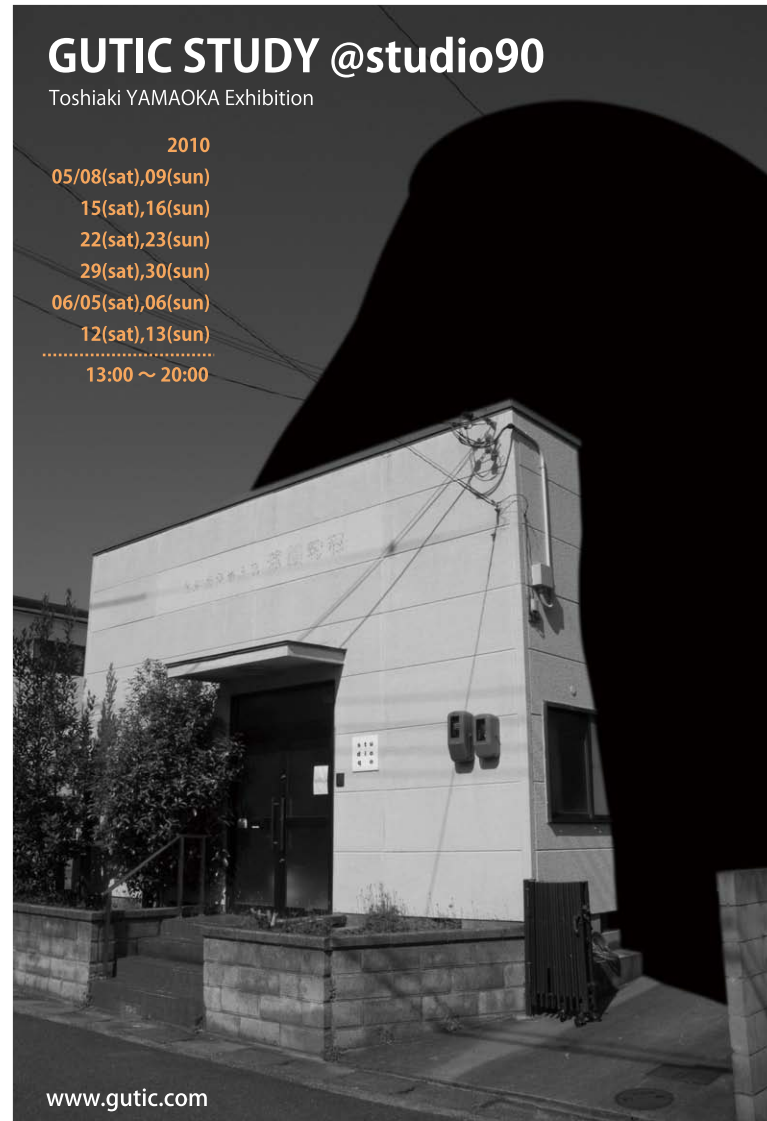
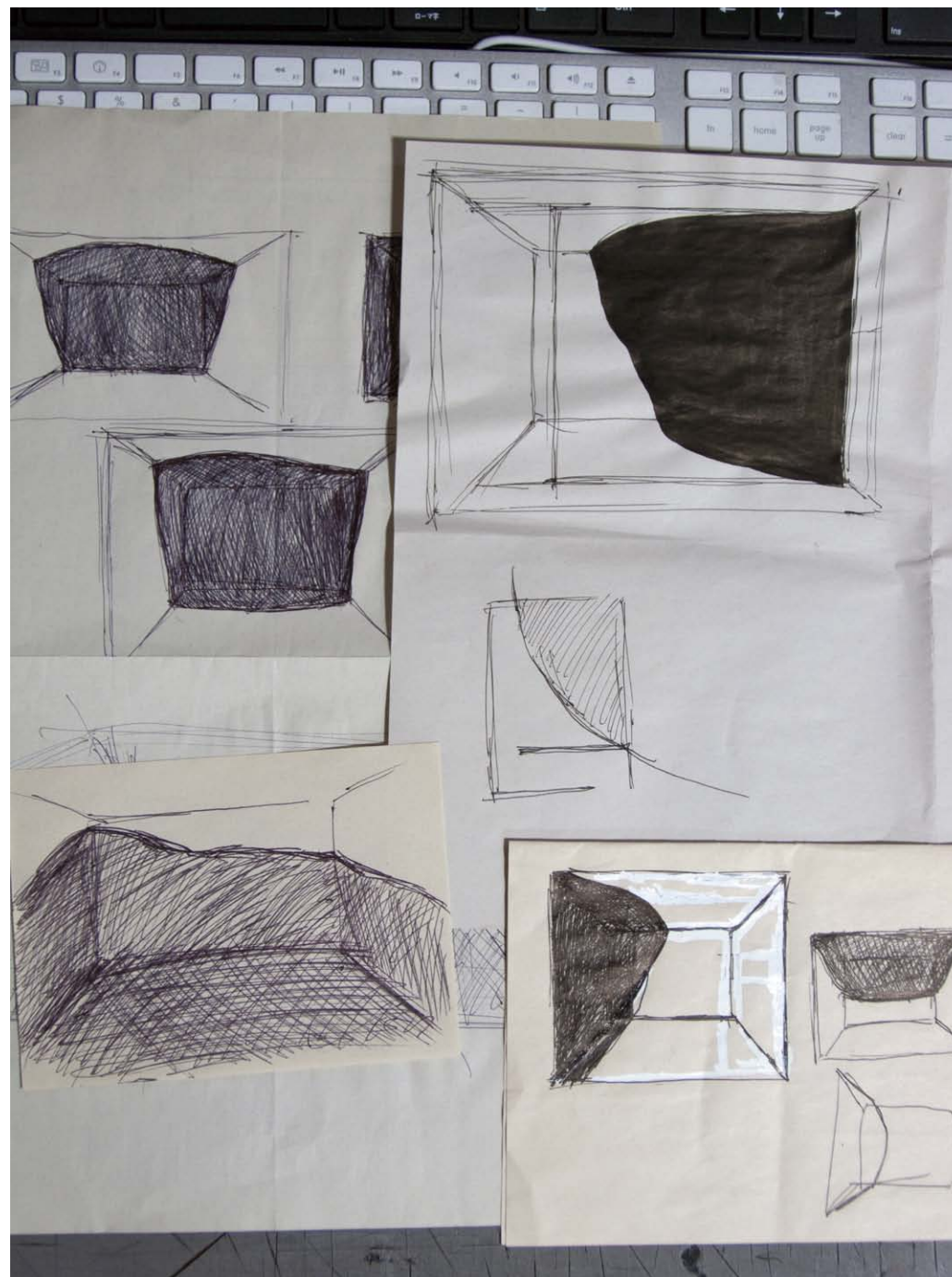




Invitation Card



アーティスト共同スタジオの傍らで大きく開いたオルタナティブスペースで、天井を含む空間全体にグチックの断片を出現させる。

ドビュッシーの「芸術とは、最も美しい嘘のことである」という言葉を引くまでもなく、芸術はどこまでいっても「絵に描いた餅」であり、「絵空事」である。それは紛れもない事実であり、誰もがそのことを了解しているにも関わらず、我々の心は否応なくその嘘に揺さぶられることになる。

山岡敏明の作品にはそうした心を揺さぶる「嘘」が周到に、且つ大胆に盛り込まれている。まず、彼の作品に付けられた「グチック」という聞き慣れない言葉である。細かい説明は省くが、山岡によると、普段目には見えないある塊が、私たちの周囲に確かに存在していて、その塊を総体してグチックと名付けたという。それは宇宙からでも見える大きさになったかと思うと、玉のように飛び回ることもある。グチックとは、まったくもって不定形な「何か」なのだ。端から聞けば、突拍子もない馬鹿げた嘘だと思われるかも知れない。しかし、山岡にとってこれは、人生を賭しても追い求めるべき切実な真実なのである。

今回そのグチックがこの studio90 に出現する。まず、ギャラリーに入って目に入るのがモニターに浮かぶ映像である。この映像にはこの studio90 の建物が映し出されているのだが、屋根の上に何か黒い塊、そう、グチックが刻々と形を変えながら蠢いている。さらに、その奥には、映像に映し出されたグチックの断片が突如として姿を現す。しかしそれらはあくまでグチックの「見えている部分」でしかなく、さらに地下深くへと続いているという。山岡はその断片を、遺跡を発掘するように、丹念に掘り出していく。その「発掘作業」はまずいくつかのドローイングから始まる。

ドローイングを重ねることで、その場に立ち現れるグチックの姿を探り出し、ようやく実際のグチックをその場に立ち現せるのである。

このグチックの前に対峙した時に起こる空間認識の歪みは注目すべき点であろう。空間とは基本的に、スタティックなものである。しかし、我々の感覚の中ではフレキシブルなものへと変化する。かつて、セザンヌはサント・ヴィクトワール山を、実際より遥かに大きなスケールで描いた。その違いは写真に撮って見ると一目瞭然だ。どうしてもセザンヌの描いた山より小さなサイズで印画紙に焼き付いてしまう。これは紛れもない事実の改ざん行為ではあるのだけれど、実際にその山を前にすると、セザンヌの描いたようなスケールで我々の前にそびえ立つのだそうだ。例えば旅行に行って、雄大な自然に圧倒され、思わずカメラを向けてシャッターを切るのだけど、どうしても自分の感じたスケールと合致しないということがある。セザンヌはその感動そのものをキャンバスに描き出したのだ。この挿話が教えてくれるのは、果たして事実なんてものがどれほど重要なのだろうということである。そもそも事実なんてものは、ものごとのひとつの側面でしかないにも関わらず、我々の想像力を圧倒的な力で締め上げる力が備わっている。そこから一瞬でも開放してくれるのが、芸術の醍醐味であるのかもしれない。このギャラリーに潜む漆黒のボリューム、またはボイドの中に、あなたは何を見つけ出すことができるだろうか。

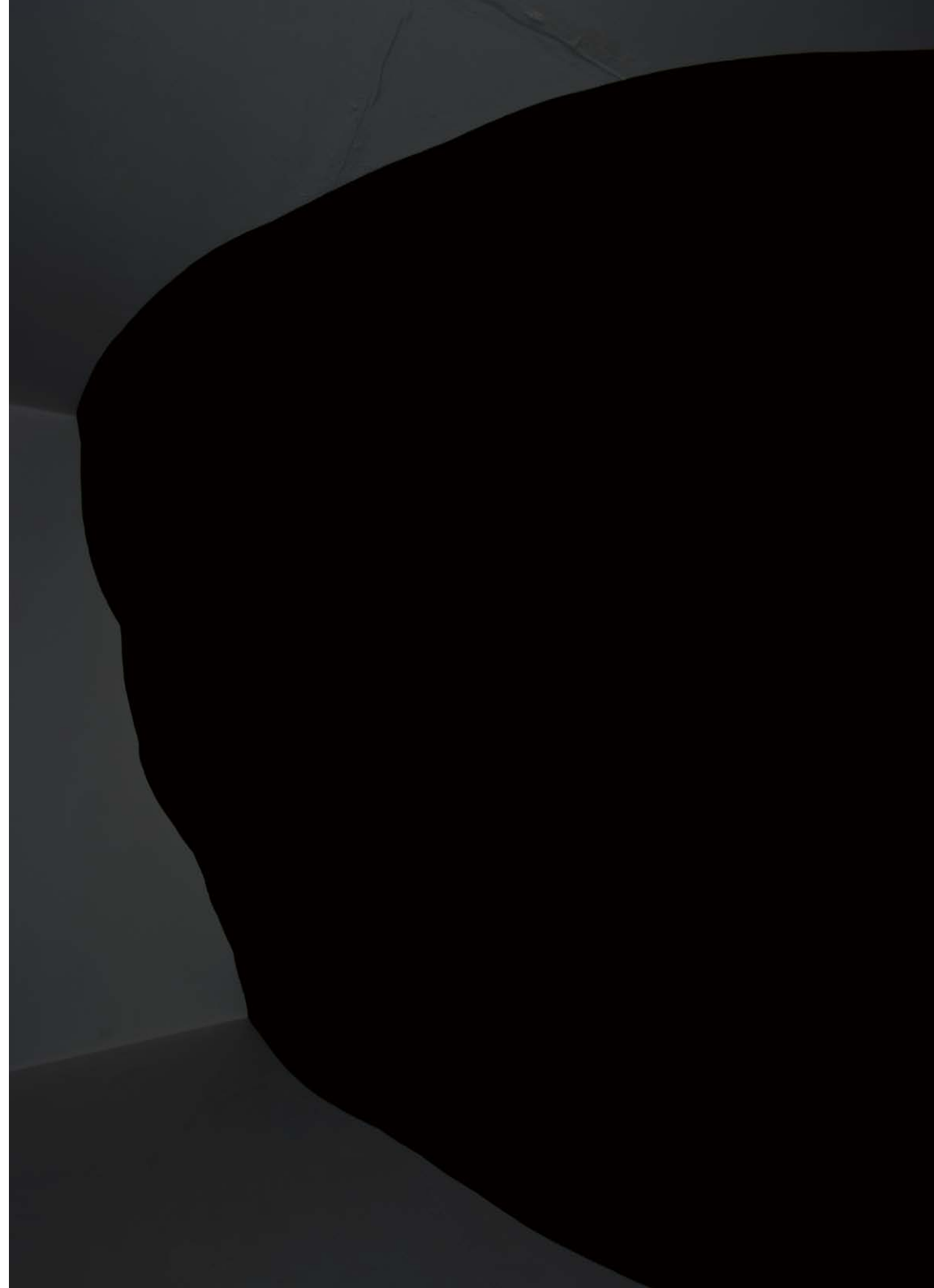
最後に、20 世紀最大の芸術家パブロ・ピカソの言葉を。「芸術とは、我々に真実を気づかせてくれる嘘である」

森川穰



幻の量塊であるグチックの一部であるため、実際は壁と床に漆黒の塗料が塗られているのみで、物理的なボリュームは実在しない。観者の認識の中で、膨らみとして形作られる。

撮影：表 恒匡







摄影：表 恒匡

山岡敏明：GUTIC STUDY

編集部ノート

執筆：平田 剛志

公開日：2010年 6月 04日

暗闇のなかに何かが「見える」。その気配や存在を「ある」と認識させるものは何なのか。それは本展を「経験」すればわかるかもしれない。鑑賞者はたった一人でこの会場に入り、暗闇の中で「GUTIC」と向き合う時間を過ごさなければならない。そこであなたの身の上にかかる変化や感情の動きこそ、「GUTIC」が創出したものに他ならない。私たちは暗闇の中で見ることを問い、疑い、考え、そしてよく見ようとする。その見ることの揺らぎはこれまでとは異なる視覚・知覚経験となるだろう。

有史以前、洞窟の中に壁画が描かれたように、暗闇の中に人類は「絵画」を見てきた。だとすれば、山岡の本展もイメージの起源を求める試みなのかもしれない。

最終更新 2010年 7月 03日

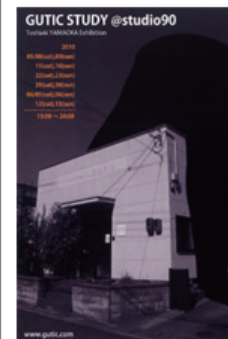
KALONSNET テキスト

artscapeレビュー／プレビュー

2010年07月15日号

Report

GUTIC STUDY @studio90 山岡敏明展



会期：2010/05/08～2010/06/13

studio90[京都府]

この展覧会へ行くと言ったら、一緒にいた作家に「“グチック”の人ですね」と言われ、「“グチック”ってなに？」とつい聞いてしまった。どうやら山岡自身が作品（視覚現象）に名付けた言葉のようだ。普段は目に見えないが、たしかに存在している塊のような「なにか」を総称して“グチック”と呼ぶのだそう。引き戸を開けて暗い室内に入ると左手の突き当たり、会場の隅っこにモニタがあり、会場であるstudio90の外観が映し出されている。その建物の屋根には、DMの写真と同じく、塔のようなカタチをした黒い塊が突き出ている。先にその映像を見て、さらに奥へ進み真っ暗な中に立ち、しばらくすると目の前にモヤッとその黒い塊のカタチが見えてきた。これが“グチック”なのか。じっと見ているとそのカタチは大きくなったり少しだけ動いたりしているように感じられる。実際には、壁面を部分的に黒く塗っているだけだと後で聞いた。山岡はこれまでもこのような“グチック”の作品を発表しているが、“グチック”は、感覚的にはペインティングだという。真実とはなにかを追究する作家の制作の姿勢が作品とそのまま重なり興味深い。ちなみに、一体この空間はどうなっているのかと手を前に出しながらゆっくり直進したときに、私が考えていたよりもうんと手前で壁に触れたのにも驚いてしまった。見ようとする事と見えることのあいだで何を「真実として」見るのか。後で自作について話してくれた作家の言葉が印象に残った。

2010/06/13(日) (酒井千穂)

artscape レビュー